

「インターン」生活から考える 都市・農村交流と農村調査

石山 俊

Ⅰ はじめに

都市・農村交流に対する関心が高まっている。都市・農村交流といっても、市町村の姉妹提携、農産物の産直、山村留学をはじめとした多彩な形をとる。いま注目を集めている形態のひとつとして、グリーン・ツーリズムと呼ばれる農村滞在スタイルをあげることができるだろう。「都市生活者がゆとりある余暇の過ごし方を求めて、緑ゆたかで個性的な地域文化に囲まれた美しい農村に滞在することを

目的とした旅行」と表現されるように（井上他一九九六…ⁱ⁾）、グリーン・ツーリズムにおける都市・農村交流という概念は、農村住民が都市へ行くことではなく、都市民が農村を訪れることを指す。その背景にはスロー・フード、スロー・ライフ（辻二〇〇一）という言葉に象徴される農村的価値観に対する都市民の渴望が横たわっているといえよう。他方、都市民を受け入れる側の農村、山村、漁村を抱える地域では、グリーン・ツーリズムが地域活性化の処方箋として期待されている。

グリーン・ツーリズムの基本理念の特徴は、農村文化、農村的時間・空間の切り売りではなく、都市・農村間の交流に重点を置く点にある。一時的な訪問者ではなく、リ

ピーターとなって「田舎」を継続的に体験してもらいたい、という「交流」に重点を置くことが実践者（受け入れ側）から広く主張されている点に、従来の観光旅行と一線を画すグリーン・ツーリズムの独自性がある。

グリーン・ツーリズムに代表される都市・農村交流のひとつの究極的な形は、都市民の農村への移住であろう。農業をくみ入れながらゆとりある日々を過ごす農的暮らしは、生活に息苦しさを覚える都市民にとって魅力あふれるものと写るであろう。都市民が出身地とは異なる農村へ移住する行為は、「イターン」と呼ばれる。^{*1}「イターン」希望者の増加にこたえるため、過疎化農村地域を抱える自治体では二〇〇〇年以降、「イターン」者を支援するための部署を設置し始めた。しかし、都市民の農村への移住は多くの問題がつきまとう。第一に、移住地域をどのように選ぶかという問題、第二に居住する家をどのように探すかという問題、第三に移住先での生計をどのようにたてていくかという問題、そして第四に移住先の集落の人々にどのように受け入れてもらえるかという問題である。

農村から都市への移住は歴史的に見ても常態化している人の流れである。それゆえ都市は移住者を受け入れるためのシステムが発達している。都市には不動産業が発達し、基本的に資金さえあれば誰でも住処を借りることができる。景気の波にも左右されるが、仕事も農村よりは見つか

りやすい。そして、農村に比べると面倒な近所付き合いがないので、どこに住もうと地域のしきたりに縛られることはなく、プライバシーが守られた生活を送ることができる。

人を流出させ続けてきた農村には、都市とは反対に、外来者の受け入れ機能はない。だからこそ都市から農村への移住には多くの困難が待ちうけている。たとえ首尾よく住処と仕事が見つかったとしても、近隣との人間関係、地域のしきたりに馴染むことができず、都市生活に戻るケースも少なくはない。しかし地域に馴染むことができたなら、農村生活は都市生活とは違う豊かさを提供する。

私は、「イターン」に近い形で福井県の農村に四年ほど暮らした経験がある。本稿では、私の経験をもとに、都市民が農村住民となっていくさまを追いつながら、農村を研究対象とするフィールドワークについて考えてみたい。

Ⅱ ムラ入りの経緯

「あんたはこの集落のために来たのだから、もっと頑張ってもらわなきゃ困る」と寄合の場で言われたのは、私がS集落に住み始めて二年めに入った二〇〇五年のことであった。

S集落は福井県今立町^{*2}の東端に位置するT谷の中の最奥

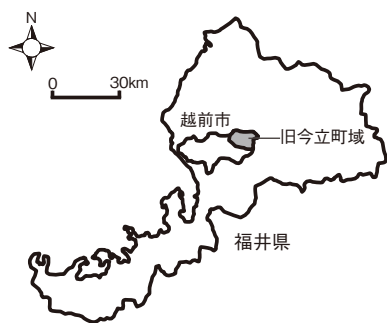


図 1 旧今立町の位置

森のエネルギーフォーラムは、そもそも自然エネルギーに関心を持つ地域住民、新聞記者、研究者たちによって二〇〇四年に設立されたNPO法人である。創設時の会員の中心的な関心は、風車による自然エネルギー活用、薪ストーブによる自然資源利用が中心にあった。森のエネルギーフォーラムの起源は、一九八〇年代初頭にT谷に住みついた画家による芸術文化活動にまでさかのぼる。

にある世帯数二三の過疎に直面する集落であった(図1、図2)。全世帯中、五世帯は独居老人世帯で、子どもの数も少なく、集落全体で小学生が三人、中学生が二人という状況であった。

S集落に住み始めた私に課された仕事は、集落を拠点として、地域資源を生かした地域おこしを試みることであった。この地域おこしは、T谷に本拠を置くNPO法人森のエネルギーフォーラム(以下、森のエネルギーフォーラム)の事業のひとつであった。

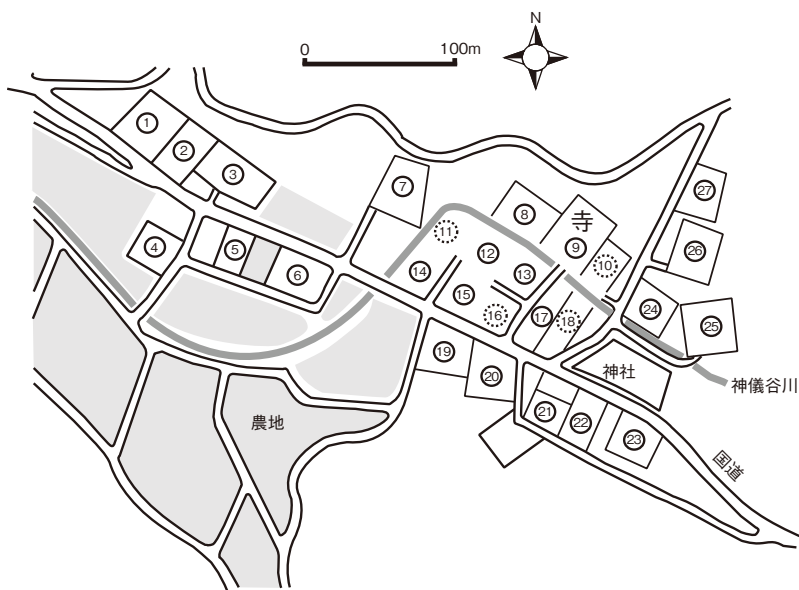


図 2 S集落の地図

(注) 番号は家屋を指す。
点線で囲われた番号は2004年時点での空家。
筆者の住居は18の家屋。

その活動は、絵画や陶芸教室といった芸術文化活動だけではなく、地域まちの若者を巻き込んだ幅広い地域運動に結びついていく。たとえば、現代美術紙展は現在まで三〇年来継続しているし、千年先の未来を見越した地域づくりを提言するために、地元まちの有志によつて始められた「結い村基本構想研究会」は一九九二年から二年半にわたつて活動し成果報告書が出された（今立町結い村基本構想研究会一九九四）。これらの活動が二〇〇四年の森のエネルギーフォーラム設立へと発展していく（増田・杉村二〇〇九・三九―五三）。

私がS集落に住むことになったきっかけは、設立間もない森のエネルギーフォーラムが今立町から「地域資源・地域文化調査事業」を二〇〇四年度緊急雇用事業として受託し、私がこの事業の調査員として関わることになったことにある。それ以前の私は、日本の環境NGOによるアフリカ、チャド国における砂漠化対処事業の現地駐在員を経て、大学院でアフリカ研究を続けていた。アフリカ半乾燥地で穀物農耕民を対象とした研究をする中で、日本の農村へも関心を持ち始めたことが私にS集落に移住することを決心させたのである。

「地域資源・地域文化調査事業」の一年間の調査は、実際に私がS集落で農村生活を体験しながら進められた。調査拠点として、S集落にある空家を借り、以来四年間この

家が私の住処となり、森のエネルギーフォーラムの活動拠点となった。

S集落の住人としての私の当面の課題は、集落行事への参加であった。もつとも重要な集落行事は、毎月二七日に行われる「定会」と呼ばれる寄合である。定会の機会を利用して、私は森のエネルギーフォーラムの活動報告、活動企画をS集落の住民に伝えることを試みた。先に記した叱咤が飛んだのは私がS集落の一員として慣れ始めた矢先のことであった。この言葉の背景には、「他所者」から住民へと変化した私の立場が関係していた。

私が実際にS集落に住み始めたのは二〇〇四年八月からであったが、いつまで住み続けることができるのか不明確であったため、しばらくは住民票を移さずにいた。集落の人々は住民ではない私に一定の距離を置いていたのかもしれない。移住当初から集落行事には参加していたが、当時はまだ一人一人の顔を覚えることもできず円滑なコミュニケーションもとれていなかった。私が住民票を移したのは二〇〇五年の四月で、S集落住民一人一人の顔もようやく覚えらるようになった頃であった。先の叱咤は、集落の住民と認知された洗礼であったといえるだろう。

農村に住めば即座に農村集落の住民となれるわけではない。強い紐帯で結びついてきた住民に認められたとき初めて、移住者は住民として認知される。農村集落の住民とし

て受け入れられることに成功した移住者はそれぞれ、住民として認知されるまでの「村入り過程」を持っている。私の場合も同様であった。以下では、「Ｉターン」者の私がＳ集落の住民となっていく過程を考察していこう。

Ⅲ 古民家に暮らす——住処をつくる

１ 家さがし

田舎暮らしをテーマとする雑誌、地方自治体、ＮＰＯが「田舎暮らし物件」を誌面やウェブサイトに掲載して農村移住希望者との橋渡しをする試みが増えてきたにもかかわらず、「Ｉターン」希望の都市民が、農村に居住する家屋を自分の力で見つけることは案外難しい。

森のエネルギーフォーラムによる「地域資源・地域文化調査事業」の開始前には、Ｓ集落の空家を借りて、そこに調査拠点を置くことがすでに計画されていた。Ｓ集落に調査拠点を置こうとした理由として、Ｓ集落がＴ谷の最奥に位置していたこと、過疎化が激しかったこと、ＮＰＯ活動に協力的な住民がいたこと、森のエネルギーフォーラムが活動場として頻繁に利用するハツ杉森林学習センターにもっとも近い集落であったことをあげることができる。

当時Ｓ集落には四軒の空家があり、そのうちいずれかを借りることができる可能性が高いと思われた。しかし、他人に家を貸すことに同意した家主は四人中一人のみであった。二軒の家主はそれぞれ他所に住んでいるがしばしばＳ集落に帰ってくるし、もう一軒の家主は将来的にＳ集落に帰村することを考えていたため貸家を承諾することはなかった。



写真１ ＮＰＯ活動拠点を兼ねた筆者の住宅

福井市に住んでいたＯ氏所有の家が残る一軒であった。私を含めた森のエネルギーフォーラムの主要メンバーにはＯ氏との直接的な面識がなかったため、Ｏ氏の親せきでこの空家を管理するＳ集落在住のＫ氏に仲介を依頼する必要があった。そこで森のエネルギーフォーラム理事長、副理事長、Ｋ氏と私とが福井市に住むＯ氏を訪ね借家を直接依頼することになった。Ｏ氏との話し合いの末、月額二万五千円でＳ集落の空家を借り受けることになった（写真１）。

Ｏ氏自身によれば、家を貸すことを了承した理由は二つある。ひとつめはＯ氏が婿養子で結婚当初からＳ集落外に居住

し、家に対する思い入れが少なかったこと、二つめは空家として放っておくよりも誰かが住んでいた方が家屋の傷みが少ないことである。

仮に私が個人でS集落に住処を見つけようとしたら多くの困難が伴ったであろう。私たちがS集落に家を借りることができたのは、個人ではなくNPOが事業の一環として家を借りるという理由づけがあったこと、森のエネルギーフォーラムの当時の理事長M氏がT谷のR集落に住む地域住民であったことの二点に加えて、S集落の中に積極的な応援者がいたことによるところが大きい。もともと力強い応援をくれたのは、集落の過疎化に危機感を抱いていたE子さんであった。E子さんは、S集落の築九〇年の家に夫のY氏と暮らす農家の奥さんである。E子さん夫妻は、森のエネルギーフォーラム事業のための田を提供してくれただけではなく、私の移住とNPO活動に対する協力をなにかにつけて集落の人々に依頼してくれていたのである。そのおかげで、多くのS集落住民は、私の生活と地域おこし活動を好意的に受け止めてくれていたようだ。

2 家屋構造

福井県は地理的文化的に、嶺北地方と呼ばれる北東半分と、嶺南地方と呼ばれる南西半分で大きく二つにわかれ

る。これらの地方は旧国名でそれぞれ越前地方、若狭地方とも呼ばれる。嶺北・嶺南地方の家屋はそれぞれ三つの型に分類されるが（福井県教育委員会 一九九八・二一五）、S集落には越前Ⅱ型と分類される家屋が多い。空家も含めて二七軒のうち一七軒がこの型の家屋構造を持つ^{*}。このタイプの家屋の特徴は、妻入り玄関、田の字型に配置された一階座敷という特徴を持つ。私たちが借りた家屋も基本的にこの越前Ⅱ型の間取りを持っていた（図3）。

一階の間取りは、土間、座敷、台所からなる。土間は玄関の続きに位置する。この広い土間は、そもそも農作業も可能なように土のままであったが、現代では板敷になってるのが普通だ。そのため今では板の間と呼ばれることもある。土間の奥の座敷は通常四面あることが多いが、私たちが借りた家の座敷は二面であった。向かって右の座敷は仏間で、奥には仏壇を置くスペースがある。その裏には控えの間と呼ばれる六畳の部屋がある。この部屋は、仏事に来た僧侶や親せきの者が、人目に触れないように休息をとる場所である。座敷は来客時や法事のときに使用する場で、日常生活では使用しない。

二階の表側は厨子^{つし}と呼ばれる物置で、ここに藁や薪などを貯蔵する。厨子の端には二メートル四方の穴が空き、滑車を利用して玄関からモノの出し入れができる構造となっている。二階の奥は二面の座敷があり、一階奥の階段から

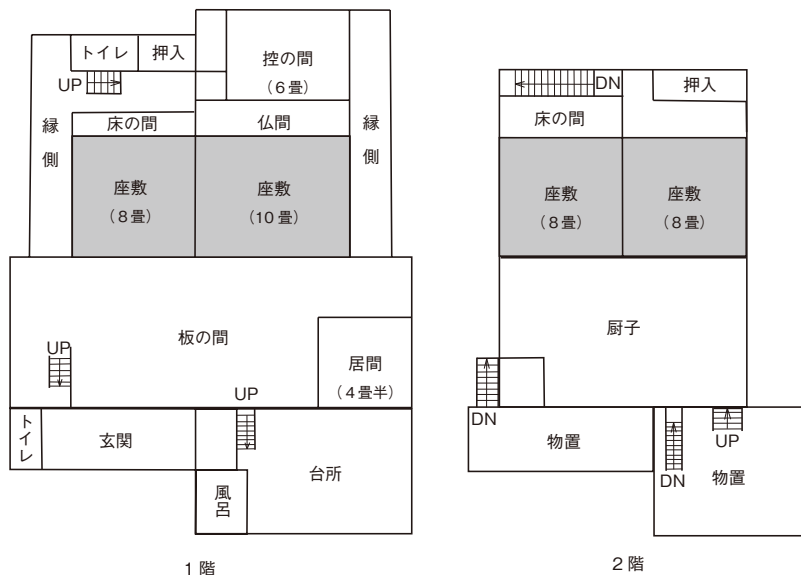


図3 家屋構造

3家の修理

上り下りができる構造となっている。台所真上の物置には、台所からの階段が通じ、その物置から厨子に入ることができる。二階の厨子と二階座敷の間は通じていない。雪国の農家づくりの間取は、私の住居にすると同時にNPOの活動拠点として使用するために十分な広さを持っていたが、修理をする箇所が多々あった。

私たちが借りた家は、無人になってからすでに二〇年近く経過しており、そのままでは、とうてい生活できない状態であった。一階板の間の床は部分的に腐り、給湯器設備、電気設備、ガス設備もさびついていた。家の修理は、可能な限り自力で修理するという方針で臨んだが、いくつかの工事は素人には不可能であった。たとえば給湯器自体は解体現場から無料で貰ってきたが、その設置は専門の業者に依頼する必要がある。床の修理材料も無料でもらってきた廃材を利用したが、板の加工と張り替え作業は大工さんに依頼した。さらに電気設備は資格を持つ者に依頼しなければならなかった。基本方針に反して自力で修繕ができたところは案外少なかったが、台所の流し台、水道栓などの作業は自力で設置することができた。

無料の材料調達を支援してくれたのは、今立町内外の森

のエネルギーフォーラム関係者たちであった。町内で建築設計事務所を構えるJ氏は、家屋解体情報を察知すると、家主と解体業者に掛け合い、給湯器、畳などの入手に協力してくれた。岡山在住のN氏が家の近隣で集めた廃棄直前の梱包廃材は床材となった。

最低限の生活ができる設備が整った時点で、私は自室の造作にとりかかり始めた。私の自室として、台所上の中二階の物置に使われていた空間を改装して使用することにした。台所に薪ストーブを設置する予定であったので、台所の上階を自室にすると暖房効率が良いし、日常生活の動線を考えた場合に便利であると考えたからである。しかしこの空間はそもそも物置として使われていたもので、居室にするためにはいくつかの問題があった。床板は薄く強度に不安があったし、壁と柱の間と軒には細い隙間があり冬の隙間風対策を施す必要があった(写真2)。



写真2 壁の塗り替え作業

造作作業は、床を補強すること、壁の隙間を埋めつつ塗り替えることから始まった。壁塗りを主導してくれたのは前出のJ氏であった。床の補強は、N氏が

見つけた梱包廃材を敷き詰めることによって解決し、その上に解体現場から運んだ畳を敷き詰めた。

家屋補修が一段落した二〇〇四年一月初頭、台所に薪ストーブを設置した。台所とその上に作った私の居室が日常生活においてもっとも使用頻度が高くなるため、そこを自然エネルギーで暖めようという魂胆であった。最低限の居住設備が整ったのは私が住み始めてから二ヵ月が経った頃であった。

家屋の修理に関しては、S集落の人々が直接関わることはなかった。私に対して遠慮の気持ちがあったのかもしれない。かといって作業にまったく関心がなかったわけではないらしい。回収後に我が家を訪れた集落の人々は、「ここには囲炉裏があった」「この部分は後になって作り変えられた箇所だ」などと、この家の思い出を懐かしそうに話してくれたことがたびたびあった。

4 古民家暮らしの意味

都市で住処を探すことを考えたとき、建売住宅を買うか、賃貸住宅を借りるか、資金に余裕があれば土地を買って注文住宅を建てるかという三通りの選択肢がある。農村ではどうか。イターン者が、慣れぬ地でいきなり土地を買って家を建てるということはまず不可能であろう。そう

なると必然的に空家を探すことになる。そして農的暮らしを実践するために借りる家は、伝統的民家がふさわしいと考えるであろう。S集落に残る古民家は、共通の基本構造を持っているという点では、同じ形の家屋が並ぶ都市の建売住宅とそう差異はないのかもしれない。しかし、住み手の使い勝手にあわせて家屋を改造する自由度は、建売住宅とはくらべものにならないほど大きい。私がしたように、物置を改造して居室にしようとか、カマドの煙突を薪ストーブの煙突として流用しようとか、工夫をすれば素人でも生活に合わせて家を造り変えていくことはなんとかできてしまう。私にとって古民家を改修することは、自分が住む家屋を、自分が思い描く生活スタイルに自らの手で近づけていくための作業であった。

IV 農的暮らしの中から居場所をつくる

1 集落行事参加による関係構築

移住者にとっての集落行事

家屋の改修が農的暮らしのハード面での第一歩であるならば、集落の人々との関係づくりは、農的暮らしのソフト面での第一歩である。農村に住んでいるだけでは、近隣の

人々から「住民」とは認めてもらえない。集落を構成する一員としての住民となるためには、集落行事への参加が、まずなされなければならない重要な点となる。

S集落の生活は、かつてに比べればかなり個人化する傾向を持つ。共同作業は減り、就業年齢にある人々は、昼の間は近隣の職場に働きに出る。しかしS集落ではおよそ月に一回以上の割合で集落行事が行われ、そこには共同体的な暮らしの側面が残る。主なものをだけを数えても一八にも達する(表1)。集落の住民となった私にはこれらの集落行事に参加する義務が生ずることになる。行事参加は新参者が住民一人一人の顔と雰囲気を感じるには良い機会でもあり、集落のさまざまなしきたりを感じることもできる機会ともなる。私には、方言を覚える格好の機会でもあった。以下、私のフィールドノートをもとに、五つの行事について記してみたい。

定会

集落行事でもっとも重要なものは定会である。定会とは毎月二七日に開かれる寄合を指す。一世帯から一名が出席せねばならない。通常、男性世帯主が定会へ出席するが、男性世帯主の都合が悪い時は女性が出席することもある。女性独居世帯ではもちろん女性が定会に出席する。

定会が始まる時間は夜七時半である。集落内のお寺の本堂が定会の会場となる。公民館などの公共施設を持つ集落

表 1 S 集落の主な行事

月	行事	主催	内容
1	箱渡式	集落、農家組合	新旧役員の引継（役員のみ参加）
2	火祭り	集落	集落南の尾根上の秋葉神社に参拝
3	クリーンキャンペーン	集落（市内一斉行事）	国道のゴミ拾い
3	神社の草むしり	集落	春祭りの準備の一環
4	電気柵立て	農家組合	耕地周囲に害獣対策電気柵を設置
4	春祭り	集落	白山神社の祭礼
7	道刈り	集落	山端、川端の草刈
7	社会奉仕	集落（市内一斉行事）	区道脇を中心とした草刈
8	水源そうじ	水道使用者	取水桝、貯水タンクの掃除
8	雑用割	集落	上半期の集落費用の精算
8	T 谷地区夏祭り	集落、T 谷連合会	T 谷全体の夏祭り
9	クリーンキャンペーン	集落（市内一斉行事）	国道のゴミ拾い
9	神社の草むしり	集落	秋祭りの準備の一環
10	秋祭り	集落	白山神社の祭礼、獅子返し
10	T 谷地区運動会	集落、T 谷連合会	T 谷の地区対抗運動会
11	役員改選	集落	定会において選挙
12	電気柵解体	農家組合	電気柵の解体
12	雑用割	集落	下半期の集落費用の精算

（出典）筆者作成。

では、その施設が定例会場となるが、S 集落はそうした施設を持たないので、お寺が会場となる。

定会に先立ち、夜七時から講が開かれる。読経が始まる時間になると人々は数珠を片手に本堂に集まりだしてくる。読経が終わると、住職の短い講話が続ぎ、賽銭を集めて講は終了する。

講が終わるといよいよ定会が始まる。司会を担当するのは毎年選出される区長である。まず、区長からの報告事項で定会が始まる。報告内容は、市からの通達事項、区長会の報告が主なものだ。報告が一通り済むと、集落の行事日程と内容、会計報告などの話し合いが続く。これらの審議事項が済むと、農家組合長から報告、審議事項が検討される。定会が終了するのは夜九時頃となる。

S 集落に住み始め、定会に意気込んで出席した私は、話し合いの内容をほとんど理解できなかった。その理由は三つある。ひとつは、この地方の方言がよく理解できなかったことであった。大筋はわかったものの、微妙なニュアンスが理解できず、肝心の結論部分の理解は曖昧であった。二つめは、各世帯を屋号で呼んでいたため、どの家が話題にあがっているかを理解できなかったことである。幸い私は本名で呼ばれていたもので、私に関することを聞き逃すことはなかった。三つめは、地籍が多く出てくることであった。たとえば共有地の整備などは「赤田の上」や「八幡の

かかり」といった地籍を用いた表現を使うため、いったいどこを整備するのか、最初の頃は検討がまったくつかなかったのである。それでもわからない箇所は両隣に座った人に聞きながらなんとか理解することができた。移住二年目くらいには、こうした集落の表現にも慣れ、定会において緊張しながら聞き耳を立てるということは少なくなっていた。

電気柵張り（四月）

三月も半ばを過ぎ、雪が解け始めてくると、農作業の準備が始まる。田おこし、畑の準備、日ごと忙しくなる季節だ。それと同時に、農作物を荒らす害獣対策も始めなければいけない時期でもある。

S 集落の農業にとっても厄介な動物はイノシシだ。イノシシ害に一番効果的な手段は電気柵である。地面から二〇（三〇センチメートル間隔で三本の金属線を張り、高圧電流を流す。これでイノシシ害は格段に減る。

電気柵は世帯ごとに所有、設置されるのではない。集落の農家組合が共同で所有し、すべての耕地を囲むように設置される。耕地があつまっている、こうした共同所有、共同設置が可能となるのだ。離れた耕地もあるが、その場合持ち主がそれぞれ、害獣対策をたてることになる。

電気柵の全長は二キロメートル以上にも及ぶ。雪の重みで支柱が曲がるのを回避するために冬の間は電気柵を解体

しなければならない。春になったら解体された電気柵を再び設置するのだ。設置作業は半日ほどで終了する。支柱を立て、三本の線を延々と張っていく作業は単調で苦痛が伴う作業ではなく、やってみると案外楽しいものであった。その理由は、集落の一員として皆が認めてくれたうえで、たわいもない話に興じながら作業に参加できたからである。私のような新参者にとっては、格好の情報収集の場ともなった。定会で話題にあがった地籍名と耕地を照らし合わせることでできたのもこの作業の最中であつたし、集落の耕地の所有者がおおかた判明したのもこの機会であつた。

社会奉仕（七月）

七月のもっとも重要な集落行事は「社会奉仕」だ。山際や川端といった共有箇所はこの「社会奉仕」として草刈をする。

朝八時に神社前に集合し、草刈機へ給油した後、区長からの挨拶を受ける。続けて持ち場の割り振りが言い渡される。草刈機を使わない年配女性たちは、鎌を手にして、機械の刈り残しを丁寧に仕上げていく。

一〇時の休憩のときにはアイスクリームと飲料が支給される。三〇分間の休憩の後作業を再開し、お寺の鐘が鳴る一一時半まで午前の作業は続く。

午後の作業は夏の日差しがいくぶん弱まる二時から三時

の間に始まる。午後の作業も一回の休憩をはさみ五時前には終了する。

作業が終わると慰労会が待っている。各自風呂を浴びてから区長宅に集合する。慰労会では仕出し弁当とビールが供される。両隣に座った人は、私のコップにビールをこまめに注いでくれるので、お腹はすぐに一杯になり酔いがまわってくる。S集落では、全世帯代表が揃って酒を酌み交わすことは少ない。^{*}この慰労会は貴重な交流の場となるのである。

水源そうじ（八月）

S集落の人々の大半は「山の水」を飲んでいる。山中を流れる沢から簡易水道を引き、各戸で利用しているのである。この簡易水道は、戦後間もなく共同作業によって引かれたという。S集落では二戸を除いてすべての世帯でこの簡易水道を利用している。公共水道を引いている家も多いが、日常の飲料水としてこの「山の水」の味を「カルキ臭くない」と公共水道水の味よりも評価する人は多い。

「山の水」の取水口は集落上流の沢に埋められた柵である。ここで取水された水が集落近くの貯水槽にためられた後、各戸の蛇口まで届くようになっていく。この取水柵と貯水槽を毎夏に掃除するのである。この作業は「山の水」を利用して世帯から一名が参加することになっている。水源掃除は暑い夏の最中に行われるが、冷たい水に浸



写真3 玄関で「暴れる」獅子

一〇月一、二、三日と決まっている。

春祭りは神主の祝詞が中心となるが、秋祭りの中心は、祝詞と獅子返しである。

祭りの準備として神社の草取りと「のぼり立て」をする。草取りをするのは一〜二週間前の日曜日である。「のぼり立て」は祭り第一日の朝六時から始める。この日が平日にあたる場合もあるので、勤めに出る人も参加できる時間帯だからである。さて、のぼり立てが住むと祭りの準備が整う。神主が来る日は、神主の都合と近隣集落の祭り日程と調整をしながら決める。

獅子返しは秋祭りの二日目の夜に行われる。獅子返しとは、お獅子が各戸を訪れ厄払いをする行事だ（写真3）。聞くとところによると、昔は獅子が土足のまま家の中に入

かりながら進められる作業はかなり快適である。そして私にとってこの作業は、普段使用する水がどこからどのように流れてくるものかを理解する機会でもあった。

秋まつり（一〇月）

稲の収穫が終わると、秋祭りがやってくる。期日は

り、「大暴れ」することともあったという。その方がご利用益が大きいそうだ。獅子を先導するのは区長の役割である。区長の後に提灯、太鼓、獅子と祭列が続く。二〇名あまりの男たちが「もーさーき、もーそ」といいながら集落を練り歩く。この言葉の意味は「門先でもの申す」ということだそうだが、なぜそのような文言を唱えるかは誰も知らない。途中三回の休憩が入る。休憩をとる家は決まっていて、家の中に招き入れられ神酒が振舞われる。集落の家を一通り訪問した後、お獅子は神社に帰り、社で深夜まで酒盛りが行われる。

2 農的暮らしと住民としての自信

農作業

農村への移住を試みたいがいの都市民は、農的暮らしに関心を持っているので、移住先で農業を始めるだろう。私自身にも農的暮らしに対する願望があったので、S集落に移住後、米づくりと野菜づくりを実践することになった。米づくりは、森のエネルギーフォーラムの事業の一環として、二〇〇四年から始めた。とはいっても耕作面積はごく小規模で、七畝の水田で実践したにすぎない。田植えと稲刈りは、森のエネルギーフォーラムのイベントとして行うため十数名の参加者が集うが、日常の水田管理は私の役割

であった。一連の水田管理作業は基本的には手作業で行わざるをえなかった。機械を所有しているわけでもないし、狭い面積であったので手作業でもなんとか可能であったからである。

五月中旬の田植えが済むと、六月に二回の中耕、六月から八月にかけて四回の畔草刈り、水田の草取り、追肥まき、田ビエ抜き、水位管理と多くの作業が待っている。今日、S集落の人々が行う稲作作業では、田植え機、動力中耕機、肥料散布機、農薬散布機、コンバインと実に多様な機械を使用する。コンバインで収穫した初め軽トラックの荷台に設置した専用袋に詰められたあと、農協の乾燥機に持ち込まれる。人間の主な役割は状況を見極めることと機会を操作することだけなのである。とはいっても、稲作の状況判断には長年の経験と知識が必要であり私のような素人が簡単にできるものではない。私たちの米づくりでは、草刈には機械を使用したものの、それ以外は基本的に手作業であった。刈り取った稲の乾燥も、乾燥機で一気に乾かす現代的な方法ではなく、稲架がけによる方法であった。

こうした手作業は、移住間もない私と集落の人とを近づける効用があった。おおむね五〇代以上の人々は、機械化以前の稲作経験を有している。昭和三〇年代までは、田仕事のひとつは手作業で、田植えのときの苗のくくり方から、田植えの目印にする杵の扱い方、刈り取った稲の結び



写真4 玄関先での籾干し

方、藁を使った縄ないといった作業は五〇代の人なら誰でもできる。

稲架による乾燥が十分である場合、脱穀後に籾を地面に広げて乾燥させる必要がある（写真4）。これをS集落では籾干しと呼ぶが、通りが

かりの住民たちが家の前に広げた籾を見て、干し加減についてアドバイスをしてくれることがたびたびあった。たとえば、広げた籾の表面は波状にすれば表面積が増し早く乾燥できること、今では計測器を使用する乾燥度の確認は、慣れてしまえば歯で噛んでみてもわかることなどである。

ある年には稲をかけた稲架が強風によって翌朝に倒壊する事件が起こった。手伝いに来ていた友人と再び稲架かける作業をしていたところ、通りかかった老人に稲架用の稲束の結び方を丁寧に教えてもらったことがある。

他方、野菜づくりも住民との関係づくりの重要な場となった。水田の隣に七畝ほどの農地を借り受け、野菜畑としていた。隣の農地はE子さん夫妻の野菜畑であった。慣れない動作で野菜をつくる私に、E子さん夫妻はさまざま

な世話を焼いてくれた。種の蒔き方、施肥のしかたを教えてもらうにとどまらず、自家採取の種をくれたり、お茶菓子をつけてくれることも多々あった。

S集落の人々はどうも農地で悪戦苦闘する私を、まことに細かく観察していたようだ。道ですれ違った老婆に「あんちゃん、今日は田んぼで苦労しなすっていたののお」と突然言われたこともあったし、稲架を片づけていたとき脇を通った老婆には「ようががんばりなさるのお」と励まされたこともあった。初心者^が手作業で四苦八苦しながら田畑で格闘するさまは、集落の人々に格好の話題を提供していたのである。観察者のつもりでS集落に住み始めた私は、逆に住民からの観察対象となり、住民としての資質を確かめられていたのである。

農家民宿

合併によって越前市となる前の今立町には行政主導のグリーン・ツーリズム研究会が二〇〇四年に発足し、農家民宿、農業体験を軸にした地域おこし事業が始められた。私は物見遊山的関心からその会合に参加していた。この事業では、一〇件程度の家が「宿泊受入農家」として、都市民の滞在を受け入れていた。農家民宿は通常、数名の個人客が中心であるが、旅行会社との共同企画によって、十数組の滞在者を一度に受け入れることもある。二〇〇六年の秋にもこうした共同企画が組まれた。ところが応募者が多

かったので受入農家数が不足し、私に受入「農家」となるように要請が来たのである。私はそれを承諾し、兵庫から来た二名の女性を受け入れることとなった。

農家民泊受入農家にまず期待されることは、田舎の生活スタイルを宿泊者に体験してもらうことにある。私が受入「農家」となった二〇〇六年は、S集落に住み始めて三年が経ち、農村生活をかなり習得していた時期であった。

米、野菜は自家製であるし、地域の女性から習った田舎料理も人に提供できるくらいの技量にはなっていた。こうしたさやかな自信から私は受入「農家」となることを決めたのである。我家に宿泊した二名の女性は、田舎料理、秋野菜の収穫、薪ストーブを囲んだ語らいといった田舎体験に満足したようである。後日この宿泊者から届いた葉書に



写真5 集落の女性からつるし柿づくりを習う

は「はじめは移住者の家に宿泊すると聞いてがっかりしたが、想像以上に田舎体験を満喫できた」と記されていた。

これとは別の機会には、体験メニューとしてつるし柿づくりを伝授したこともある。S集落の女性たちは春には干し山菜、秋にはつ

るし柿、タクアンといった自家製の保存食をつくる。集落の女性に教えを請い、私自身がタクアン漬けとつるし柿づくりに挑戦した経験が生かされたのであった（写真5）。

「農家」として宿泊者受け入れは、私にとって大きな転機であった。他人に対してS集落の住民として振る舞うことが初めてできたからである。S集落に住み始めて三年間、それまでは新参者としてさまざまなものを習うばかりであった私に、ようやく集落を語り、田舎暮らしを語る機会が与えられたことになる。

3 集落から地域へ

「地域資源・地域文化調査事業」をきっかけとしてS集落に住みつき、住民としての体裁と心構えが整ってきた私に新たな展開が訪れたのは、居住四年目のことであった。

二〇〇七年四月から越前市の「NPOセンター」の事務局スタッフとして関わるようになり、集落から地域へと私の行動範囲が広がり始めた。このNPOセンターは「NPO（のっぽ）えちぜん」という名称を持ち、二〇〇四年に旧武生市内に拠点を置く市民団体・NPOが主体になって設立されたものである。^{*}「NPOえちぜん」発足直後は、市の財政的支援を得て一名の専任スタッフを置き、市の施設を市民活動交流室として加盟団体の活動の場として使用し

ていた。しかし、市からの財政的支援が打ち切られた後、交流室は残ったものの、その運営は市の職員によってまかなわれていた。市からの支援が二〇〇七年度から復活するに際し、私が事務局員として「NPOえちぜん」の運営の一端を担うことになった。実は事務局員には私を含めて三名が応募したことを後になって知った。その中から私が選出された理由を考えてみると、二つのことが思いあたる。ひとつはチャドでのNGO経験と森のエネルギーフォーラムでの活動経験が考慮されたこと。二つめは新参者であるがゆえ、地域の利害関係とは一線を画していたことである。

「NPOえちぜん」に関わるることによって越前市内で地道に行われてきた多くの市民活動やNPO活動を私自身が知ることができたし、同時にイターン者としてS集落に暮らす私自身の存在も加盟団体のスタッフを中心に広く知ってもらえることができた。地域のコミュニティFMで番組を受け持ったこともそのひとつであろう。

このNPOセンターには隣の鯖江市に拠点を置くコミュニティFM局、「たんなん夢レディオ」も加入していた。「たんなん夢レディオ」は鯖江市に拠点を置いていたが、越前市と福井市の一部も受信範囲に入っていた。越前市域からの情報発信強化という「たんなん夢レディオ」の方針を受ける形で「NPOえちぜん」が番組を受け持ち始めたのは、私が着任して半年後のことであった。



写真6 コミュニティラジオの収録

あった。初めてのラジオ番組は私に大きなプレッシャーを与えたことも事実であるが、その半面私のそれまでの経験談をはさみながらの受け答えは存外充実したものであった。S集落での経験にとどまらず、それ以前から携わってきたアフリカでの経験、都会での暮らしを背景としながら番組を組み立てていくことができたからである(写真6)。

V おわりに

これまで、私がS集落住民として地域の一員となるまでの過程を、住处づくり、関係づくり、地域でのネットワーク拡大というプロセスを追いながら記してきた。すべての

「NPOえちぜん」が受け持つ一時間番組は「コラボ・ステーション」という名が冠された。私が番組を担当したのは二カ月に一度であった。主な内容は地域で活躍する、NPO活動、市民活動、国際協力活動に関わる人たちへのインタビューで

プロセスにおいて、S集落での私の生活は、三つの側面を持っていた。ひとつめはIターン住民としての側面、二つめは農村調査者としての側面、三つめはNPOによる地域おこしアクターとしての側面である。本稿ではこのうちひとつめに挙げた、Iターン者が集落住民になりきっていくさまを主に述べてきたが、この過程は同時に、調査者あるいは地域おこしアクターとして地域住民とどのような関係づくりをしていくべきかという問題にも関連する。

農村を対象に調査をする際、地域住民との信頼関係構築はもつとも考慮されなければならないことであろう。関係構築の難しさと繊細さは、多くの調査者が経験する「ムラ入りの苦勞」にあらわれる。この点は、Iターン者が住民として認められるか否かという問題と重なる。住民に認められなければ、地域の一員となることはできないし、調査の際に十分な情報を得ることは難しいからである。

しかしIターン者と調査者の間の歴然とした差異は、居住者たるか否かにある。調査者は居住者として認められなくとも、住民からの信用を得さえすればその役割を全うしうる。とはいえ調査者が住民の生活感覚を理解できるか否かは、農村における調査・研究が住民にとってどれだけ現実味を帯びたものになりうるかの大きな分岐点でもある。研究者である以上、学問的な問題意識を前提とし、フィールド調査によって信頼しうる情報を蓄積させていくこと

は、研究を進めていくうえでの前提となるが、その研究が住民にとってどのような意味があるのか。この問題を住民と率直に語りあうことができるのであれば、フィールド調査は研究の立場を定位する絶好の機会ともなりうる。地域おこしアクターにとっても、住民の生活感覚と住民の問題意識と矛盾しない計画をデザインできなければ、住民に支持されうる地域活性化は困難となるろう。

調査者の場合、対象地域に長期間住み込み、継続的で密着的な調査が常に行けるとは限らない。では、どのようにしたら住民により近い調査・研究ができるのか。私の「Iターン」経験から導き出された今のところの答えは、調査対象地域の人々と時間と空間をいかに分かち合うかが、調査対象の人々により近い感覚を身につけられるか否かの鍵を握る。地道な分かち合いを重ねるたびに、調査者と調査対象者・社会の隙間が埋まり、「身内」意識が醸成されていくのではないだろうか。

二〇〇八年三月、四年におよぶ私のS集落での生活は終わりを迎えた。その理由は、私が現在の職場で中東・アフリカ乾燥地を対象にした研究プロジェクトに従事するため京都に住む必要が生じたからであった。S集落に移住する以前からチャド国を中心としてアフリカ研究を続けてきた私にとっては、S集落での生活という迂回路を経て本来の仕事に戻ったということになる。S集落から京都への移住

だろうか。

●注

*1 「Iターン」という表現は、都市生活から故郷に戻る「Uターン」、故郷に近い都市に戻る「Jターン」から派生した言葉である。「I」が示す意味は、地縁がない場所への直線的な移動である。したがって「ターン」を用いる表現は現象を的確に表すものではない。

*2 二〇〇五年一〇月に今立町は東隣の武生市と合併し越前市となった。

*3 この調査事業の結果は、調査報告書（森のエネルギーフォーラム二〇〇五）として今立町に提出された。

*4 S集落で越前II型の家屋構造を持たない家屋は九軒ある。そのうち六軒は木造モルタル造りの比較的新しい二階建て家屋で、三軒は平屋の木造家屋である。

*5 T谷の他集落の中には、住民間の親睦のために慰安旅行を毎年行ったり、世帯主が集まり新年会を開くところもある。

*6 この団体は、二〇〇四年の発足当時「NPO（のっぽ）武生」という名称であったが、合併を機に市名にあわせて「NPO（のっぽ）えちぜん」と改名され、旧今立町に拠点を持つNPO四団体が加盟した。

●引用文献

井上和衛・中村攻・山崎光弘（一九九六）『日本型グリーンツーリズム』都市文化社。

田中秀幸編（一九九四）『いまだて結い村基本構想』。

は、同時にS集落という継続的調査地が生まれたことでもあった。以降私は、機会を見つけてS集落を訪れ継続的な定点観測することとなった。私にとってS集落は、生活の場から調査対象地へと変わってしまったわけだが、集落の人々は私の顔を見るにつけ「帰ってきた」という表現を用いて迎えてくれる。アフリカの調査地の人たちと同様に、S集落の人々が私のことを一定期間、生活空間・時間を分かち合った「身内」とみなしてくれるからであろう。

農村でのフィールド調査に際し、もうひとつ大切なことは、調査者・住民の関係だけではなく、調査者が都市・農村間の橋渡しをいかにしうるかという問題である。私の「Iターン」生活の第一の目標は、集落の一員として認められることにあった。そしてS集落の住民としてまわりに認められ始めた頃、幸いにも農家民泊客を受け入れ、市のNPOセンターにたずさわリ、コミュニティ・ラジオ番組に出演し、それまでの経験を発信する機会に恵まれた。その情報発信には、アフリカにおけるNGO経験から始まるS集落以前の経験も多分に含まれていた。ひたすら地域に没入していくだけではなく、地域にいったん受け入れられた他所者が、今度は地域から外に向かって自分の経験を曝けだしながら声をあげていく。こうした経験と知識の往復運動と相互発信が、都市―農村交流の橋渡し役としての農村フィールド調査者に今求められていることなのではない

辻信一（二〇〇一）『スロー・イズ・ビューティフル——遅さと
しての文化』平凡社。

福井県教育委員会（一九九八）『日本の民家調査報告書集成八

中部地方の民家二 富山 石川 福井』東洋書林。

増田頼保・杉村和彦（二〇〇九）「いまだて遊作塾の出発と活動
の水脈」杉村和彦編『二世紀の田舎学——遊ぶことと作る
こと』世界思想社、三一—五四頁。

森のエネルギーフォーラム（二〇〇五）『地域資源・地域文化調
査活用事業報告書』。

（いしやま・しゅん／総合地球環境学研究所）